

May, 1981

甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

No. 53

日本産マルドロムシ科概説

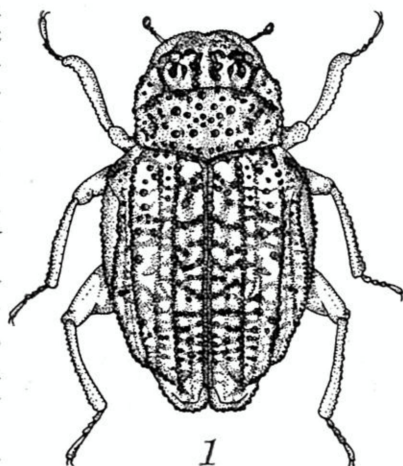
佐藤正孝

概要 この科の甲虫は、マルドロムシ属(*Georiss* s) だけで代表され体長1~2mmと小さいにもかかわらず、その示す形態的特徴は他の群から容易に分けられることもあって、古くから独立の科としては扱われていた。しかし、和名の示す印象はドロムシ類の一員を思わせるように、従来ほとんどの研究者がそのように取扱ってきた。この科の所属については、これまで問題がなかった訳ではない。たとえば、KOLBE (1901)はヒメマキムシ科(Lathridiidae), ホソマメムシ科(Thorictidae), ヒメドロムシ科(Elmidae) などとともにガムシ科(Hydrophilidae)の近くに位置させたり、SHARP & MUIR (1912)は雄交尾器の研究からミズスマシ科(Gyrinidae)とガムシ科に近いことを述べ、MEIXNIR (1935)もガムシ科近縁であることを示唆している。このように、ガムシ科との関係深いことが指摘されてはいたが、CROWSON (1950)は、甲虫分類の再検討の中ではっきりとガムシ上科にこの科を移した。しかしこの折にはまだ幼虫が判らないままであったが、EMDEN (1956)が幼虫を明らかにすることによって、その示す形態は確かにガムシ上科に属することが裏付けられた。なお、ガムシ上科内での他の科との区別は、本誌No.40 (1978)でホソガムシ科の解説を行なった折に検索を示したので、それを参照されたい。

いっぽう、種についてはまとまったものがなく、ZAITZEV (1910)によるJUNKの甲虫カタログで20種が世界各地から記録されていることが判るだけである。その後、幾つかの種が記載され、最近になってDELÉVE (1967~1974)がアフリカおよび東南アジアから多くの種を記載し始めたが、残念なことに

1973年に亡くなった。理在世界中での種はおそらく50種くらいになっているものと思われる。

日本の種については、1880年にLEWISが札幌で採集した標本に基づいてSHARP(1888)が*G. canalifer*を記載した。この種は、その後三輪(1937, 1938)が図説した。第二次大戦後、黒沢(1950)は第2番目の種を*G. laeiscollis* GERMERとして本州から記録したが、中根(1963)はこの種を新種とし、*G. kurosawai*と命名した。第3番目の種は、佐藤(1970)が新潟県の標本に基づいて*G. babai*として記載した。さらに、佐藤(1972)は日本産種のまとめを行ない、2亜属を新設し3種を記載した。またその目録は、本会のチェックリストNo.5 (1976)でもすでに公にした。



第1図 *Georissus (Nipponogeorissus) granulosus* M.SATO セスジマルドロムシ (石田勝義画)

生態 マルドロムシ類の生態については、ほとんど何も判っていない。これまで成虫を採集された方々の経験からは、そのほとんどが主として清澄な河川の中・上流域において、河原の水辺で砂の上を少し動く微小昆虫を見つけたのが、この類であったといわれている。筆者自身も何度かこのような環境で採集したことがあるが、炎天下の河原での探索は実には大変であるし、背面に泥が付着していることが多いので非常に見つけにくい。上記に似た例としては、野村・馬場(1961)が洪水後の河岸や中洲の泥土上で見つけることができることを報告している。また、筆者は*G. japonicus*を池の中で、岸に近い場所の落葉に付着していたのを採集したことがある。さらに、燈火にも時として飛来する。

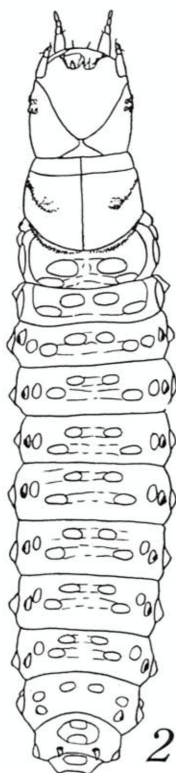
幼生期 EMDEN(1956)による唯一の報告があるのみで、それも僅か2個体採集されただけである。この幼虫は*G. crenulatus* (ROSSI)で、ヨーロッパでは

普通の種のようなものである。幼虫の発見された場所は、ドイツのMünch 近くの Hebertshansen で、1cmの深さの水虫でコケや藻類の付着した粘土上をゆっくりと動いていたとある。その幼虫の形態を簡単に紹介しておきたい。

体長：2.05mm，頭幅：0.29mm.

全体は淡褐色で，頭部，前胸，腹部の硬皮板は淡赤褐色，頭部はほぼ扁平で，頭楯前縁中央に1歯を装う。触角は3節で第2節に数本の感覚毛を具える。小腮枝は5節で，触角より長い。単眼は6個。大腮は大きく，内縁は鋸歯状，基部に2歯を具える。中・後胸背には2対の小さな円形硬皮板を具える。腹部は10節よりなり，背面第1～7節には3対の小さな円形硬皮板を具え，第8節には2対，第9節には1対の硬皮板を具え，第1～8節に気門があり，第10節には1対の小さな尾突起を具える。中・後胸および腹部側縁には側硬小突起を具える。肢は短く，転節，腿節，脛・跗節からなり，爪は1本で脛・跗節の中に融合したように認められる。

一般形態 体長2mm前後の



第2図 *Georissus (Georissus) crenulatus* (ROSSI) の幼虫 (EMDEN, 1956 による)

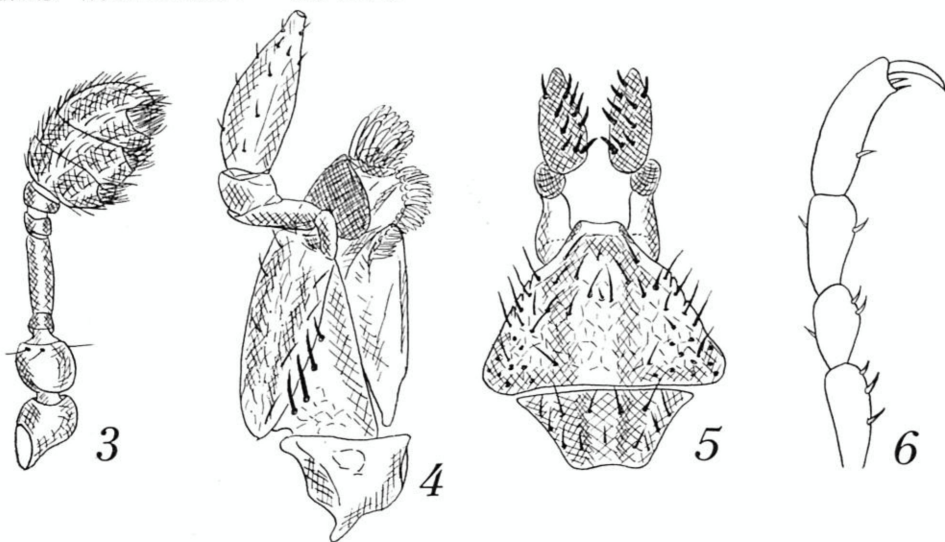
小型種。体は円形で，背面はよく膨隆する。頭部は下を向き，前胸背に隠され背面から認められなく，背面は顆粒を具えるか，隆条で区画される凹陥部があり，Y字状印刻が認められる。眼は比較的小さい。触角は小腮枝より長く，9節で先端3節は被毛して球桿部を形成し，第6節は盃状となる。小腮枝は4節で，先端3節は長く，基部3節を合せたとはほぼ同じ，下唇枝は3節。前胸背はほぼ半円形で，側縁は前縁に融合する形で丸まるので，前縁角は認められない。背面は一様でなく，点刻，顆粒，溝，凹陥などを装い，正中溝が認められる。翅鞘はよく膨隆し，背面は数条の点刻列，顆粒列，縦隆列などを装い，肩部は明瞭，後翅は単純で，肘脈は明確に認められる。腹面はほぼ平坦。前胸側縁中央には前肢を納める溝を具える。前基節孔は両側に離れている。前胸腹板突起を欠き，中胸腹板はよく発達する。後基節は平坦，腹部は背板が8節あり，腹板は5節が明瞭に外面から認められ，第1節は大きい。肢はほどよい長さで，跗節は第1節が退化し，4節が認められる。雄交尾器は三片型で，基片が大きく，側片は中央片より長い。

分類 唯一属，*Georissus* だけで構成されている科であるが，佐藤(1972)はそれを3亜属に分割した。なお，それぞれの亜属は容易に区別できるので，原記載の折に検索を付けなかったが，やはり検索表があった方が便利と考え，後に別の報告(1979)の中でそれを示した。

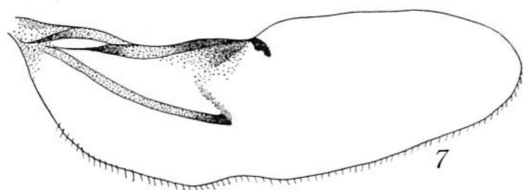
Genus *Georissus* LATREILLE, 1809, マルドロムシ属

模式種：*Byrrhus crenulatus* ROSSI, 1774 (ヨーロッパ産)。

これまで，多くの研究者が *Georyssus* と綴ってきたが，原記載は *Georissus* となっているので，後



第3～6図. *G. (G.) babai* M. SATO ババマルドロムシの各部形態—3：触角，4：小腮枝および小腮内・外葉，5：下唇枝および下唇，6：前跗節。



第7図 *G. (G.) babai* M.SATO ババマルドロマシの翅脈。

者の綴りを使うのがよいと思う。

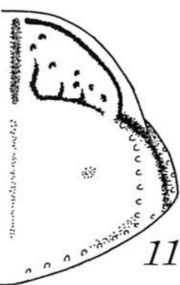
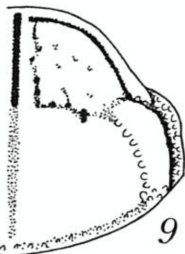
亜属の検索

- 1 (4) 頭部背面は前半に顆粒を具え、後半に僅かな凹陷部がある。前胸背は粗い顆粒を具える。翅鞘は粗大点刻列を有するか顆粒列を有する。
- 2 (3) 前胸背には明瞭な正中溝と前・側縁に沿った溝を有し、側縁後角付近に歯状部がない。翅鞘は粗大点刻列を有する
..... *Georissus s. str.*
- 3 (2) 前胸背には溝部を有しなく、側縁後角付近は歯状に尖る。翅鞘は顆粒列または粗大点刻列を有する.....*Neogeorissus*
- 5 (1) 頭部背面全体に隆起部によって区画される幾つかの凹陷部を有する。前胸背は密に顆粒を具える。翅鞘は全体に顆粒を具え、4隆条を有する.....*Nipponogeorissus*

Subgenus *Georissus s. str.*

- 1. *G. (G.) canalifer* SHARP, 1888 マルドロマシ (第8,9図)

体長 1.7—1.9mm。体は黒色で、背面には光沢がある。頭部は粗い顆粒を具え、後半に正中溝を有し、眼



第8～11図 *Georissus* 亜属各種の頭部背面 (8,10) と前胸背 (9,11), 8,9: *G. (G.) canalifer* SHARP マルドロマシ, 10, 11: *G. (G.) babai* M. SATO ババマルドロマシ。

の内縁に波曲した隆条がある。前胸背は微細印刻を具え、正中溝は前半において明瞭で、前・側縁に沿って条溝があり、側縁後半および後縁に沿って顆粒列がある。翅鞘には粗大点刻列を具える。

分布；北海道。

前にも述べたように、古くからよく知られている種で、この属の模式種であるヨーロッパで普通に分布する *G. (G.) crenulatus* (RSSL) によく似ている。

- 2. *G. (G.) babai* M.SATO 1970 ババマルドロマシ (第3～7, 10, 11, 20図)

体長1.5—1.7mm。前種によく似ているが、頭部の顆粒がはっきりしており、波曲した隆条がやや弱く、前胸背の微細印刻は弱く、正中溝および側溝がやや浅いことなどによって区別できる。

分布；本州 (新潟県)。

新潟県の笹口浜および中条で馬場金太郎博士が採集された標本に基づいて記載されたが、その後の記録はない。種名は馬場博士に献名したものである。

Subgenus *Neogeorissus* M.SATO, 1972

模式種：*Georissus (N.) japonicus* M. SATO, 1972.

種の検索

- 1 (4) 頭部前半に顆粒を具える。前胸背の顆粒は明瞭に認められる。翅鞘には数条の縦溝を有し、間室に顆粒列がある。
- 2 (3) 頭部後半の凹陷は顆粒によって囲まれる。翅鞘には数条のやや深い縦溝があり、間室は隆起し密で明瞭な顆粒列がある。体は暗赤褐色、体長1.4—1.5mm *japonicus*
- 3 (2) 頭部後半の凹陷は明瞭で、隆条によって囲まれる。翅鞘には数条の浅い縦溝があり、間室には粗い顆粒列がある。体は淡赤褐色。体長1.2mm *sakaii*
- 4 (1) 頭部前半に顆粒を欠く。前胸背の顆粒は明瞭でない。翅鞘には浅い粗大点刻列を有するが、間室に顆粒を欠く。体は黒色。体長1.6mm *kurosawai*

- 3. *G. (N.) japonicus* M. SATO, 1972 ヤマトマルドロマシ (第14, 15, 21図)

本種は翅鞘の顆粒列が特徴的で、他種と容易に区別できる。新潟県村上市の小さな池で筆者が採集した標本で記載したが、その後の記録がない。

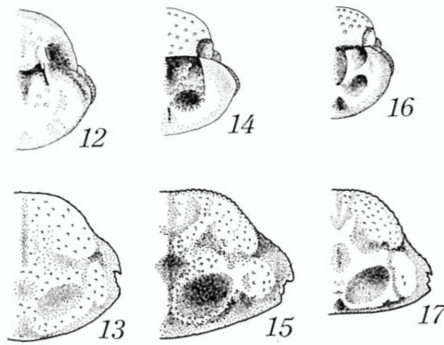
分布；本州 (新潟県)。

- 4. *G. (N.) sakaii* M. SATO, 1972 シコクマルドロマシ (第16, 17, 22図)

これまでに記載された日本産種の中では、最も小型の種である。本種は酒井雅博氏によって徳島県津田浜の砂上で採集された1♂によって記載した。やはり、その後の記録が一切ない。種名は酒井氏に因んで献名した。

分布；四国 (徳島県)。

- 5. *G. (N.) kurosawai* NAKANE, 1966 シワムネマルドロマシ (第12, 13図)



第12~17図 *Neogeorissus* 亜属各種の頭部背面と前胸背 (13, 15, 17)—12, 13: *G. (N.) kurosawai* NAKANE シワムネマルドロムシ, 14, 15: *G. (N.) japonicus* M.SATO ヤマトマルドロムシ, 16, 17: *G. (N.) sakaii* M.SATO シコクマルドロムシ。

最初、黒沢(1950)によって *G. laeicollis* GERMER として記録された。その後、名古屋産の標本を holotype として会津若松、帯広などの標本を加えて中根(1966)が記載した。筆者は小田原、能勢桂川などで採集された標本を検査したことがあり、この仲間としてはかなり広く分布している。この種は、燈火に飛来するので、多くの記録があるように考えられる。種名は黒沢良彦博士に献名されたものである。分布：北海道、本州。

Subgenus *Nipponogeorissus* M. SATO, 1972 模式種: *G. (Ni.) granulatus* M. SATO, 1972. 6. *G. (Ni.) granulatus* M. SATO, 1972 セスジマルドロムシ (第1, 18, 19図)

体長1.6mm, 体は黒褐色で、体下面、肢、口器は暗赤褐色・頭部は明瞭な隆条に囲まれた数個の凹陷を具える。前胸背は密に顆粒を具え、前半は横長の凹陷があるが、顆粒によって縦断される。翅鞘には明瞭な4縦隆条を具え、その室間に列の浅い粗大点刻列と顆粒を有する。

分布：本州(三重県)。

上記や検索に示したように、この群としては特異な形態をしている。R. A. CROWSON 博士からの私信によれば、この種は原始的なものと考えられようとの示唆をいただいた。

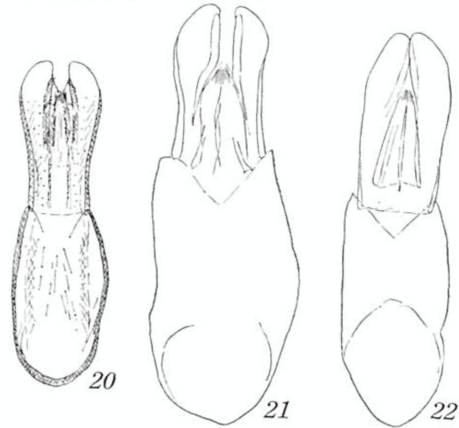
市橋甫氏が三重県津市古河に在住の折、自宅の燈火に飛来した個体を採集されたもので、僅か1♀であったが特徴がはっきりしていたので新亜属を設定して記載した。

第18~19図 *G. (Nipponogeorissus) granulatus* M.SATO セスジマルドロムシの頭部背面(18)と前胸背(19)

後記 この仲間は採集の困難なことから、ここに紹介したようにほとんど記録がない。まだかなりの新しい種を追加できそうであるので、この機会に採



集の折に注意していただけるよう諸賢をお願いしたい。末筆ではあるが、全形図を画いていただいた石田勝義氏に厚くお礼申し上げますとともに、貴重な標本をご恵与下さした各位に厚くお礼申し上げます。



第20~22図 雄交尾器:—20:*G. (G.) babai* M.SATO ババマルドロムシ, 21:*G. (N.) japonicus* M.SATO ヤマトマルドロムシ, 22:*G. (N.) sakaii* M. SATO シコクマルドロムシ

主要参考文献

CROWSON, R. A. 1950. The classification of the families of British Coleoptera, Part 1. Ent. mon. Mag., 86: 149—171.
 EMDEN, E. I. VAN, 1956. The *Georyssus* larva—a Hydrophilid. Proc. r. ent. Soc. London, (A) 31: 20—24.
 黒沢良彦, 1950. マルドロムシ科, 日本昆虫図鑑: 1107, f. 3171. 北隆館。
 三輪勇四郎, 1937. 日本産珍稀なる甲虫数科。昆虫, 11: 158—163。
 NAKANE, T. 1966. New or little known Coleoptera from Japan and its adjacent regions, XXIII. Fragm. Coleopt., Tokyo, 14: 55—58.
 SATO, M. 1970. Unnouvelle espece de genre *Georyssus* LATRAILLE au Japon (Coleoptera, Georyssidae). J. Nagoya Women's Coll., 16: 199—200.
 — 1972. The georissid beetles of Japan. J. Nagoya Women's Coll., 18: 207—213.
 — 1976. Check-list of Coleoptera of Japan, 5. Family Georissidae: 1—2, Coleopt. Assoc. Japan, Tokyo.
 — 1979. Ergebnisse der Bhutan-Expedition 1972 und Indien-Nepal-Expeditionen 1975—1977, des Naturhistorischen Museums in Basel, Coleoptera: Fam. Georissidae, Hydraenidae, Hydrophilidae nud Ptilodactylidae. Entom. Basili., Basel, 4: 43—67.
 SHARP, D. 1888. Descriptions of some new Coleoptera from Japan. Ann. Mag. nat. Hist., (6) 2: 242—245. (名古屋女子大学)

アオカミキリ備忘録(3)

黒沢良彦

(4) キムネムラサキカミリの学名

キムネムラサキカミキリ *Aphrodisium yugaii* KANO, 1933, ホリシヤアオカミキリ *A. horishanense* KANO, 1933, およびキムネウスグロミドリカミキリ *Aromia (Tomentaromia) faldermannii insularis* GRESSITT, 1936 の3種は共に台湾から記載された種類である。その異同については従来から論議されて来た所であるが、その扱いは人によって一定してなく、特に最近の PODANY による扱いはお粗末なものである。以下に現在に至るまでの経過を述べ。それについての私の意見を述べてみたいと思う。まず年代順に関係のある業績を列記すると次の通りである。

1. 1925, SCHWARZER B.: Sauters Formosa-Ausbeute (Col., Cerambycidae), Ent. Blätter, 21 (1), p. 24.

台湾中部の Hozan (宝山) で採れた標本に基づき *Aphrodisium? semivelutinum* SCHWARZER を記載した。

2. 1927, 鹿野忠雄: 日本産天牛類の記(IV), 台湾博物学会会報, 17, (91), p. 285.

台湾中部の霧社からタイワンジャコウカミキリ *Aromia faldermannii* E. SAUNDERS, 1850 を記録した。本種は元来華北から記載された種類で、シベリア東部、モンゴル、中国全土に広く分布することになっている。

3. 1931, 三輪勇四郎: 台湾産昆虫分類目録(鞘翅目), 台湾総督府中央研究所農業部報告, 55, p. 229.

台湾の Niitaka (新高山?) からやはり *Aromia faldermannii* E. SAUNDERS, 1850 を記録したが、和名はキクビウスバネカミキリとした。

4. 1933, KANO, T.: New and unrecorded longicorn-beetles from Japan and its adjacent territories, Kontyu, 6. pp. 272~273.

台湾の埔里付近の眉原産の1♀(30.vii. 1926, 鹿野忠雄採集)に基づきホリシヤアオカミキリ *Aphrodisium horishanense* KANO, 霧社産の1♂(23.

v. 1927. 鹿野忠雄採集)に基づきキムネムラサキカミキリ *Aphrodisium yugaii* KANO の2新種を記載した。

5. 1933, MATSUSHITA, M.: Beitrag zur Kenntnis der Cerambyciden des Japanischen Reichs, J. Fac. Agr. Hokkaido imp. Univ., 34, (2), pp. 251~252.

Aphrodisium? semivelutinum SCHWARZER, 1925¹⁾ に基づき新属 *Schwarzerium* を創設。 *Aromia faldermannii* E. SAUNDERS の産地に Niitaka Gebirge

を挙げているが、これは三輪の記録³⁾ に従っただけのものである。ただし、鹿野の記録²⁾ は見落している。

6. 1936, GRESSITT, J. L.: New longicorn-beetles from Formosa, III, (Coleoptera, Cerambycidae), Philip. J. Sci., 61, pp. 90~91, pl. 1, fig. 1.

台湾中部の武界(2♂♂), 八仙山(1♀)埔里(5頭), 北部の松山(1♂)産およびアメリカの California Academy of Sciences の所蔵する台湾産の1頭に基いて、*Aromia faldermannii* E. SAUNDERS 1850 の新亜種 *insularis* GRESSITT を記載した。

7. 1940, 水戸野武夫: 日本産鞘翅目分類目録, (8), 天牛科, pp. 92~94.

Aphrodisium horishanense KANO, 1933 を *Schwarzerium semivelutinum* (SCHWARZER, 1925) の異名としたが、*Aphrodisium yugaii* KANO, 1933 は独立種とし、*Aromia faldermannii insularis* GRESSITT, 1936 を *Aromia* 属の中の *Tomentaromia* 亜属に属せしめ、キムネウスグロミドリカミキリと命名した。また、鹿野の記録した *faldermannii* を *insularis* GRESSITT と同一物と認めた。

8. 1940, 平山修次郎: 原色甲虫図譜, pl. 40, fig. 8.

キムネムラサキカミキリ *Aphrodisium yugaii* KANO (*A. yungaii* KANO と誤記) ♀の原色写真を図示した。この標本は「霧社」産で翅鞘は緑色を帯びている。

9. 1951, GRESSITT, J.: Longicorn-beetles of China, Longicornia, 2, pp. 189~202.

Aromia faldermannii E. SAUNDERS, 1850 を *Tomentaromia* 亜属に属せしめ、*insularis* GRESSITT, 1936 をその台湾亜種とし、三輪が台湾から記録した *faldermannii* を *insularis* と同一と考えた。一方、*Aphrodisium horishanense* KANO, 1933 は水戸野に従い *Schwarzerium semivelutinum* (SCHWARZER, 1925) の異名とし、*Aphrodisium yugaii* KANO, 1933 は独立種とした。しかし、鹿野の記録した *faldermannii* は見落とし、三輪の記録も Niitaka (新高山) を Mt. Morrisson (次高山) と勘違いしている。

10. 1951, HAYASHI, M.: Studies on Cerambycidae from Japan and its adjacent regions (1), Ent. Rev, p. 5, 81.

Aphrodisium horishanense KANO, 1933, *A. yugaii* KANO, 1933, および *Aromia faldermannii insularis* GRESSITT, 1936 の3種をすべて同一種の色変異と認め、その種名に *horishanense* KANO,

1933 を用い、*yugaii* KANO, 1933, *insulare* GRESSITT, 1936 (*Aphrodisium* 属に移したので当然語尾も *insularis* から *insulare* とする) をその変種とした。また、触角、前基節窩、後跗節などの構造から *Schwarzerium semivelutinum* (SCHWARZER, 1925) と *Aphrodisium horishanense* KANO, 1933 とは同一種ではなく別種であるとした。

11. 1953, GRESSITT, J.L.: Notes on nomenclature of Japanese longicorn beetles, Ent. Rev., 6, p. 26.

林 (1951) の扱いに応えたもので、*Aphrodisium horishanense* KANO, *A. yugaii* KANO, および *Aromia faldermannii insularis* GRESSITT が、もし林の扱いの様に同一種の亜種か色彩変異であるならば、それらはすべて *Aromia (Tomentaromia) faldermannii* と同じ種類であり、異なる種類であっても、少なくとも *Tomentaromia* に属せしむべきである。旨を述べ、*insularis* GRESSITT は *faldermannii* と同種であることを強調している。また、*Tomentaromia* は *Aromia* の亜属とするよりは *Aphrodisium* に属させた方がよいであろうと述べている。

12. 1970, GRESSITT, J.L. & J. A. Rondon: Cerambycid-beetles of Laos, Pacific Ins. Monogr., 24, pp. 135~149.

Tomentaromia PLAVILSTSHIKOV, 1934 を *Aphrodisium* THOMSON, 1864 の全くの異名とし、亜属としても認めていない。

13. 1971, PODANY, C.: Studien über Caillichromini der palaearktischen Region, (II), Ent. Abhandl., 38, (8), pp. 253~295.

Tomentaromia を独立属と認め、*insularis* GRESSITT, 1936 を独立種としてこれに含めている。また、三輪や鹿野が台湾から記録した *faldermannii* は共に *insularis* と同一視し、新たに台湾北部から *morpha formosana* PODANY を記載している。一方、*yugaii* KANO は *Aphrodisium* の中に残し、*horishanense* は *Schwarzerium semivelutinum* のシノニム扱をし、林の記述は明らかに読んでいると思われるのに GRESSITT (1951) 一辺倒で、林 (1951) を全く理解していない。しかも、「日本から *A. yugaii* の同定付きで送られて来る標本は *Tomentaromia insularis* GRESSITT で *yugaii* よりは稀でないと見える」と記している。しかし、彼の示した *Aphrodisium* 属の種の検索表を見てみると *yugaii* は「前胸は大部分赤色または橙赤色」のグループではなく「前胸は金属色または黒色」のグループに入っているのに、*yugaii* の記載にはちゃんと「Halsschildseiten und Tarsen gelblich」と書いている。この誤が一体どこから来たのか、私には理解出来ない。GRESSITT も 1951年に示した種の検索表の中で *yugaii* の所に *tarsi and sides of prothorax fulvous* と明記しているのである。PODANYはこの他にも属の検索表の中で体表が毛で覆われて艶消しにな

るグループと毛で覆われることなく金色光沢のあるグループに初頭で大別しながらそのどちらにも *Aphrodisium* 属が出て来る様なお粗末な分け方をしていいる。しかも、この翅鞘の被毛は全くなく強く金属光沢を現すものから密に覆われ全くの艶消し状となつたものまであり、毛の長さも長短様々であるなど、変化が激しく、とてもこれによって属を別ける基準にすることは出来ない。従って、*Cataphrodisium* AURIVILLIUS, 1907, *Opacaphrodisium* PIC, 1932 などと共に属や亜属として認めることは不可能であろう。

以上が台湾のキムネムラサキカミキリの取扱いの経過である。

鹿野博士による *Aphrodisium horishanense* と *A. yugaii* の両種の前記載を讀んでみると、両者は共に前胸背の中央部を除き黄色で、跗節は黄色と明記してあるので、前胸に黄色部を欠き、跗節も黒いムラサキドウガネカミキリ *Schwarzerium semivelutinum* (SCHWARZER, 1925) には一致しない。一方、ホリシヤアオカミキリ *horishanense* とキムネムラサキカミキリ *yugaii* との相違は、単に翅鞘の色が、前者では唐金色を帯びた緑色であるのに、後者では暗紫色である点だけで、他に明確な相違点はない。いま、国立科学博物館に所蔵されている 2♂ 4♀ を調べてみると、♂ は全部暗紫色であるのに、♀ はすべて銅緑色または唐金色を帯びた青緑色である。鹿野博士の前記載を見ると、*yugaii* は暗紫色で♂、*horishanense* は銅緑色で♀ であると云う。これらの諸点から考察すると、どうやら両者は同一種の雄雌で、*yugaii* が♂、*horishanense* が♀ を指していると考えた方がよさそうである。両者は同一文献の同一頁に記載されているが、*horishanense* の方が *yugaii* よりも先行している。この場合、命名規約によれば、最初にこの事実を指摘した人の扱いが有数となる。従って、両者が同一種であることを最初に指摘した林 匡夫博士の扱いが有効となり、本種の種名は *Aphrodisium horishanense* KANO, 1933 となる。この種名が埔里社に基づくものであれば、当然 *horishaense* または *horishense* としなければならぬが、鹿野博士は誤って *horishanense* としてしまった。これでは「埔里山の」と云う意味になってしまうが、これも命名規約によって改めることはできない。

上記の通り、*yugaii* は♂、*horishanense* は♀ を指していると考えられるが、平山修次郎氏が図示したものは♂ であると考えられるのに翅鞘は緑色を帯びているので、翅鞘の色はかならずしも雄雌によって異つた一定の色をしているとは限らないかも知れない。しかし、*yugaii* や *insulare* を変種として区別する必要はないであろう。国立科学博物館所蔵の鹿野忠雄博士の蒐集品(以下単に鹿野標本と云う)の中にある本種の標本は 1♂ 3♀ であるが、いずれも模式標本とは異なる産地や日付のものばかりで、両種の完模式標本と思われる標本は、鹿野標本が国

立科学博物館に収められた当初から見当らなかった。鹿野博士が台湾から記載された種類の中には、この他にも鹿野標本の中に該当標本の見当らないものがある。

水戸野武夫氏以後、鹿野忠雄(1927)、三輪勇四郎(1931)両博士が台湾から記録した *Aromia faldermannii* E. SAUNDERS, 1850 はすべて *Aromia faldermannii insularis* GRESSITT, 1936 と同一視されているが、これは誤で、両博士とも素木標本の中にあった真の *faldermannii* を台湾産と誤認して録記されたものと私は推定している*。従って、この二つの記録は台湾から除外すべきものと私は考える。恐らく、*horishanense* は大陸の *faldermannii* の台湾における代置種となるものであろう。

台湾内における *horishanense* の分布は、模式標本の産地が、*horishanense* が南投県眉原(1♀)、*yugaii* が南投県霧社(仁愛)(1♂)、*insularis* が南投県武界(2♂♂)、南投県埔里(5頭)、南投県、台中県境の八仙山(1♀)、新竹県と苗栗県境の松山(1♂)であるが、この他に国立科学博物館に中部の Pashan(購入標本)(1♂)、Hōgō(1♂, 24. v. 1928, 一色周知採集)(鹿野標本)、霧社(1♀, v. 1960, 購入標本で産地不明確)、埔里付近(1♀, KIKUCHI 採集)(鹿野標本)、松山(1♀, 20. vii. 1933, 和泉泰吉採集。恐らく、*insularis* の paratype の一つである松山産1♂と対になるもので、採集者も共に故和泉泰吉氏である)(鹿野標本)、台北州拉拉山(拉拉山)(1♀, 23. vi. 1933 鹿野忠雄採集)(鹿野標本)などの標本があるので、台湾の中北部の山地に分布していると考えてよいであろう。しかし、余り高地にも産せず、主として標高1,500m内外の地域に多い様である。

国立科学博物館所蔵標本のうち、前記の松山産1♀と拉拉山産1♀とは、台湾中部産の標本(*horishanense* s. str.)に較べると、やや大型、頭部特に顔面は唐金色を帯びた青緑色、翅鞘は強く青緑色を帯び、光沢がより強く、前および中腿節は先端部と基部を除き暗赤色を呈し、腹部も緑青色が強いなどの相違がある。恐らく台湾北部の雪山山脈のものは、中部の *horishanense* s. str. とは異った亜種として区別されるであろう。この場合、松山産の標本(雌雄の別も頭数も全く記載にない)に基いて記載された *Tomentaromia insularis* GRESSITT morpha *formosana* PODANY, 1971 を用いなければならないであろう。ただし、*formosana* は属名が *Aphrodisium* であるから subsp. *formosanum* としなければならない。(国立科学博物館)

* この場合、両博士が記録された *faldermannii* E. SAUNDERS, 1850 の標本は華北産の同種の模式標本の中の1頭である可能性が強いが、私は実際の標本を見てないので、ここではこれ以上触れないことにする。

○訂正

「アオカミキリ備忘録(2)」(本誌第51号, 1980)で私はコバネカミキリモドキの種名を *Nothopeus hemipterus* (OLIVIER, 1795) とし、本種を基にして創られた属 *Colobus* SERVILLE, 1833 は *Colobus* ILLIGER, 1800 により先占されているので、最近ではその代りに提唱された *Nothopeus* PASCOE, 1864 が用いられている旨を記した。しかし、これは誤で、すでに *Scalenus* GISTL, 1848 が創られていることが QUENTIN & VILLIERS によって明らかにされていると云う。従って、*Nothopeus hemipterus* (OLIVIER, 1795) は今後 *Scalenus hemipterus* (OLIVIER, 1795) としなければならない。以上のことについて御注意を受けた林 匡夫博士に感謝する。なお、本種の和名はコバネカミキリモドキ(鹿野, 1927)になっているが、この名はカミキリモドキ科の種類と誤られ易いので適当ではない。しかし、台湾のファウナから本種が削除された今、強いて本種の和名を考慮する必要もあるまいと思うので、新しい和名は考えないことにする。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○ *Illis anna* SHIBATA (ヒゲナガゾウムシ科) の八丈島からの記録

Illis anna SHIBATA は、屋久島、種子島、口永良部島、トカラ中之島、奄美大島、石垣島、西表島および与那国島等の南西諸島から採集された多数の標本に基づいて SHIBATA (1969) によって記載されたヒゲナガゾウムシ亜科の種である。その後さらに MORIMOTO (1979) は、それらの地域に加えて台湾からも記録している。最近筆者は、和泉敦夫氏の御好意により伊豆諸島八丈島産の本種を検査する機会に恵まれたので、分布資料として報告したい。

1頭、伊豆諸島八丈島末吉, 15. vii. 1978, 和泉敦夫採集。

本種は背面の斑紋に著しい種内変異が認められるので本個体の斑紋の略画を添付しておく。

末筆ながら、貴重な標本を恵与され、発表を許された和泉敦夫氏に深く感謝申し上げます。

(東京農大, 妹尾俊男)



○福井県におけるサンゲチビタマムシの分布記録追加

サンゲチビタマムシ *Trachys robusta* E. SAUNDERS, 1873 はすでに福井県の最西端にあたる青葉山から記録されており、このことを、黒沢良彦(1980)は対馬海流が暖地性昆虫の分布に大きな影響を与えている事例の1つにあげて論証すると同時に、北九州から青葉山にいたる日本海沿岸地方に産地が点在しているであろうと予測している。山陰地方の調査はほとんどなされていないが、福井県内で次の地域でサンゲチビタマムシが採集されているので記録しておきたい。

大飯郡高浜町音海(Otomi) (2頭, 25. vii. 1979); 敦賀市西方ヶ岳麓常宮(Jōgū) (1頭, 29-31. v. 1976); 三方郡三方町三方石観音 (Mikata-Ishikanon) (2頭, 4. v. 1980)。

音海は若狭湾に突出した小さな半島部で照葉樹林におおわれ、最近、クチキココオログ、マツムシモドキ、キュウシュウチビトラカミキリ、アマダテントウ、ヒナカマキリなどの暖地性昆虫が豊富なことが判明した。常宮は敦賀半島の東岸にあり、常宮神社の社叢は照葉樹林がよく保存されている。また、石観音はやや内陸部に入るが、観音寺の境内から雲谷山への登り口付近は、ここも照葉樹がよく残されている。既知産地の青葉山から少しばかり東方へ記録を更新したにすぎないが、複数の地域で生息が確認されたことは、黒沢博士の推論をより確かなものとする上で意味がある。

(福井大学教育学部、佐々治寛之)

○ムネビロイネゾウモドキ青森県の記録

ムネビロイネゾウモドキ *Eteophilus notaroides* (Kono) は原記載以後数例の採集記録しかなく、それらはいずれも北海道札幌周辺でしか採集されていないという珍品である。

少し古い記録であるが、筆者の手に青森県下北半島産の本種標本があったので、報告しておく。

1♂, 青森県下北半島葉研, 10. viii. 1975, 田中巧採集。

(和歌山県有田郡、的場 績)

——<連絡・報告>——

◇談話会 昨年開催されました談話会の演題および講演者は下記の通りです。

第1回例会：昭和55年3月23日、於国立科学博物

館、講演：台湾の *Cucujus* 属 (ヒラタムシ科) について—黒沢良彦(科博)。第2回例会：昭和55年6月15日、於国立科学博物館、講演：ヨーロッパでの採集とオサムシ屋—石川良輔(都立大学)。第3回例会は都合により休会。第4回例会：昭和55年12月21日、於国立科学博物館、講演：ドロン類の最近の知見—佐藤正孝(名古屋女子大学)。

なお、談話会終了後、有志によって恒例の忘年会が「鳥正」で行われましたが、その折、会員寄贈文献等のオークションが行われ、売上金のすべてが本会に寄附されました。ご協力いただいた馬場金太郎、佐藤正孝、山崎秀雄、渡辺 徳(ABC順)の諸氏に厚くお礼申し上げます。

◇昭和55年度会計報告

一般会計収支決算報告

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	597,440	甲虫ニュース (No. 48~52)	417,428
会費	204,000	印刷費	
バックナンバ	242,000	通信・郵送費	91,230
バ		事務用品費	4,830
預金	4,653	送金手数料	400
寄附金	61,500	次年度繰越金	595,705
合 計	1,109,593	合 計	1,109,593

特別会計収支決算報告

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	273,452	甲虫目録第 4 冊印刷費	214,100
甲虫目録第1 冊	29,820	送金手数料	100
第2冊売上	29,730	次年度繰越金	220,640
第3冊売上	99,170		
預金	2,668		
合 計	43,3840	合 計	434,840

甲虫談話会

会費(一カ年)2000円、次号は8月30日発行予定。

投稿〆切は6月30日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)

なお、有頭針00, 0号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製
インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都
内及第一地帯: 3個以下¥1,400, 4個以上¥850
(以下同様), 第2地帯¥1,400, ¥950, 第3地帯
¥1,600, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作
販売しています。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-212-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479